



面白いと思うことに飛び込めば、自然と夢に近づいてゆく

元弁護士・浄土宗僧侶 堀江 利昌さん (33)

ライター・笠倉奈都
写真・大畑陽子

現在、大本山増上寺では、令和6年(2024)を迎える浄土宗開宗850年を記念した事業として、同寺大殿の屋根瓦をチタン瓦に葺き替える事業を進めている。多額の資金が必要のため、クラウドファンディングも活用し、企画立案、業者の選定から完成までを取り仕切るのには、弁護士から僧侶に転身したという異色の経歴の持ち主だ。これからどのような僧侶の道を歩まれるのか、お話を伺った。

「父は浄土宗のお寺の生まれでしたが、兄弟が多かったのでお寺を継がずに、設計の仕事をしていました。ただ、お施餓鬼の時などに、美家の寺にお手伝いに行ったり、子どもの私がお弁当やお茶を配ると集まると檀家さんが褒めてくださるんです(笑)。それが、皆がグループで発表をする

の、ひとりで美空ひばりの「川の流れるように」を電気サックスで演奏するよな、大人びた子どもだったという。

中学に入るとテニス顧問の先生がワンマンな決定をしたとき、納得いかない」と問い続ける少年だった。「好奇心が旺盛で、自分なりの考えを抱いて筋道を立てたら曲げたくない、というところがありました」

好奇心のままに

高校生の時、憲法改正の街頭演説を見かけ、大声で主張している姿を見て、「あれほどの真剣さで主張したこととは何だろう」と好奇心がうごめき、図書館で初めて憲法の本を読んだ。

その後、授業で外国籍の同級生には選挙権があるのか? という話になった。そこで「最高裁の判例によると、国政選挙では否定されているが、地方選挙においては、将来法律の改正があれば認められる余地がある」と発言すると、先生が「おまえ、カッコいいな!」と褒めてくれた。

「法律を知っていると褒められるんだ、人にはない」と褒めてくれた。そして、ついに3年目で弁護士バッチ返上を決心。「よく思い切りましたね、

知識があるとかっこいいんだ!」とうれしくなった堀江さんは、法学部に進んだ。

弁護士そして僧侶へ

「法律は教習の結果だ、なんて面白いんだ」と知的好奇心が満たされる毎日。一方で僧侶への漠然とした思いもどこかあったという。大学2年の時、文化交流プログラムでオマーンへ行き、敬虔なイスラム教徒の同級生の祈る姿の美しさを目にして、宗教の根本的な魅力を感じたことが、浄土宗の僧侶への決心になったという。

それからは法律と仏教を勉強する毎日。ついに法務研究科(ロースクール)1年生の時に僧侶の資格を得て、2年後、司法試験も一発合格を果たし、弁護士事務所へ入所した。

争いの中に身を置き

弁護士の世界に飛び込んだ堀江さんだったが、その仕事の多くは、依頼人の権利を主張し、相手の主張を否定することに費やすことが多かったという。「勝訴してもそれが本当の解決なのだろうか?」と、争って勝つことに意義を感じなくなったとき、鏡に映る自分の顔が疲れて見えた。

「よく思い切りましたね、争いの中に身を置き、争って勝つことに意義を感じなくなったとき、鏡に映る自分の顔が疲れて見えた。」

「弁護士バッチを返した後、こんなにやりがいと喜びのある仕事に出会えるとは思っていませんでした」と笑顔で語る。

弁護士と僧侶という異なるキャリアを経験したこと、感じたことを伺うと、「人間は何かとつながって、いなければ生きていけない孤独で弱い存在です。それなのに互いに権利を主張して争うのは、あえて手を結ばないという選択をしますよ。これでは苦から逃れられません」

そう語る堀江さんは、浄土宗の「同称十念(その場の皆で一緒に10回のお念仏をとなえること)」の一体



ロースクール時の堀江師

「つながらず」には「大丈夫」という安心感があります。私もさまざまな経験をしてきましたが、思い返せば、大きなたつながらりの中で導かれていたと最近思うようになりまして」

最後に今後の展望を伺うと、「これからも興味や夢を持ったことに、飛び込んでいきたいと思いますが、たとえ職業が変わったとしても、僧侶としての自分には変わるものではありません」と笑顔で語ってくれた。

僧侶として生きる

将来の見通しもないままハンドルの切ったが、思いもよらない縁が重なり増上寺に職を得て、大殿(本堂)の屋根瓦を葺き替える事業を担当している。

「弁護士バッチを返した後、こんなにやりがいと喜びのある仕事に出会えるとは思っていませんでした」と笑顔で語る。

「人間は何かとつながって、いなければ生きていけない孤独で弱い存在です。それなのに互いに権利を主張して争うのは、あえて手を結ばないという選択をしますよ。これでは苦から逃れられません」

そう語る堀江さんは、浄土宗の「同称十念(その場の皆で一緒に10回のお念仏をとなえること)」の一体

「よく思い切りましたね、争いの中に身を置き、争って勝つことに意義を感じなくなったとき、鏡に映る自分の顔が疲れて見えた。」

大本山増上寺大殿 屋根瓦志納

増上寺は、浄土宗開宗850年の慶讃事業として、同寺大殿瓦(本堂)をチタン瓦に総葺き替えるため、志納を令和3年4月末日までお願いしております。

ご志納いただいた方には、名前、為書(ご回向やお願いごと)などを記したシートを瓦に付し、後世に残します。

お申込みを希望の方は、菩提寺か、同寺850年慶讃事務局(TEL03-3432-1431)にお問合せください。



志納瓦の見本。志納者には記念品として、志納証・限定御朱印、記念品を授与

令和6年、浄土宗は開宗850年を迎えます

モノは豊かに、便利さは増すとも、法然上人が浄土宗を開いた平安の世に勝るとも劣らない混沌としたこの時代。私たちは宗祖立教開宗の御心一万人平等往生一に立ち返り、新たな歩みを進めます。



開宗850年
お念仏からはじまる幸せ



宗祖 法然上人(法然房源空)
美作国(現在の岡山県)に、父・漆間時国(うるまのときくに)、母・秦氏の子として生まれる。幼名は勢至丸。父の遺言により出家し、比叡山で仏道を学び、阿彌陀如来の万人平等救済の教えにふれて浄土宗を開く。

浄土宗とは

宗祖 法然上人(源空=1133-1212)
開宗 承安5年(1175)
本尊 阿彌陀仏(阿彌陀如来)
教え 阿彌陀仏の平等のお慈悲を信じ、「南無阿彌陀仏」とみ名をとなえて、人格を高め、社会のためにつくし、明るい安らかな毎日を送り、お浄土に生まれることを願う信仰です。
お経 お釈迦さまがお説きになった「無量寿経」「観無量寿経」「阿彌陀経」の三部経をよりどころとします。